

News Letter

International Exchange Section in Agriculture <http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/>

◆ 新入留学生オリエンテーション&歓迎パーティー ◆



29名の新入留学生(学部、大学院)及び新入外国人研究生9名を迎え、4月8日(水)に国際交流室においてオリエンテーションを行いました。その後、本部構内の「カンフォーラ」において、歓迎パーティーを開催しました。遠藤研究科

長、宮川評議員、縄田国際交流委員長、本部国際交流センターの長山教授をはじめ多数の教員、職員、在学中の留学生など総数70名余りの参加者があり、新入留学生の自己紹介などを行い、楽しい交流会となりました。

◆ サッカー & バーベキュー大会 ◆



恒例のサッカー&バーベキュー大会も第8回目を迎え、今年度は6月13日(土)に行いました。予想を遙かに上回る100人以上の試合への参加申し込みがあり、小林准教授の指揮の元でチーム編成、試合時間等を調整し、午後1時~4時30分まで十分に汗を流してサッカーゲームを楽しみました。梅田名誉教授も参加して下さい、審判をしてくださいました。国単位の参加や研究室単位の参加も多数あり、今年度はベトナムチームの優勝となりました。サッカーの後のバーベキュー大会も約80人の参加者で大いに盛り上がり、素晴らしい交流会になりました。ご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

◆ 見学旅行 ◆



7月27日(月)~29日(水)の日程で貸切バスを使い、福井県の東尋坊、永平寺、富山県の立山、黒部ダムを訪問、見学しました。参加者は留学生18名、日本人引率学生2名、引率教員2名でした。2日目にケーブルカー、ロープウェイ

など次々に乗り換えながら散策もして、立山黒部アルペンルートを満喫しました。お天気が心配されましたが、幸い、黒部ダムまでは雨に遭わず、涼しくてちょうど良い気候でした。留学生も日本人学生も、大いに日本の自然と文化を楽しむとともに、大勢の友達と思い出を作ることができました。



◆ バス1日研修 ◆



毎年、年に2回春と秋にバス1日研修を行っています。今年度は春は5月28日(木)に京大農場(高槻)に出かけました。あいにくの雨だったのは少し残念でしたが、田植えを終えられたばかりの圃場やアスパラガス等の野菜畑、果樹園などをスタッフの説明を聞きながら楽しく見学しました。参加者は引率を含めて27名でした。

◆ 2009年度 後期行事予定 ◆

■ 農学研究科特別講演会

講師 佐藤弘樹氏 FM京都α-ステーションのパーソナリティ
演題 一英語の感じ方、考え方 実践編
日時 9月30日(水) 15:00-16:30
場所 農学部総合館 W-100

■ 第3回 北部構内バザー

日時 10月15日(木) 10:00-15:00
場所 北部生協食堂西側

■ 第3回 ほっこりカフェ

演者 Tacarindua Custodio氏 (モザンビーク) 農学専攻 M1
日時 11月10日(火) 15:00-17:00
場所 農学部総合館 S-130
演題 未定

■ 第3回 北部構内餅つき大会 12月中旬又は1月中旬予定

発行 京都市左京区北白川追分町
京都大学 農学研究科 / 農学部国際交流室
電話 (075) 753-6320.6298 e-mail: fsao@kais.kyoto-u.ac.jp
*本News Letterのバックナンバーをホームページに掲載しています。http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

印刷 京都府京都市南区東九条南石田町1番地
朝陽堂印刷株式会社 電話 (075) 681-5331

国際交流を通じて得た宝物

谷坂 隆俊

【農学研究科教授】
【農学専攻】



国際交流室から「国際交流に関して何か書いて欲しい」とのご依頼がありました。「分かりました」と軽い気持ちで引き受けてしまいましたが、これまで

国際交流について真剣に考えたことがなく、「国際交流とは・・・」など気の利いたことはとても書けそうもありません。恥ずかしいかぎりですが、ここでは、記憶に残る断片的な事柄を紹介させていただき、約束を守らせていただきたいと思います。

私の国際交流は、国際原子力機関(IAEA)と世界食糧農業機構(FAO)が共催した国際共同研究(主要作物における有用半矮性遺伝子の開発、1981~1985年)への参加から始まりました。この共同研究にはUSA、イギリス、ドイツ、インドなどの十数カ国が参加し、年に一度一箇所に集まって研究実施のための討議を5日間行うというものでした。日本からは私の研究室が参加し、研究室では私が担当することになりました。それまで海外留学の経験がなかった私にとって、英語を使った外国人との厳しい論議は大いに不安でした。案の定、ウィーンで開催された最初の会合の初日にその不安は的中しました。「英語のヒアリング力をつけなければ」と思っていたところ、イギリスPlant Breeding InstituteのDr. Mike Gale(後にJohn Innes Centre教授、コムギの遺伝研究の世界的権威、本年8月に急逝)が話しかけてきました。「英語は君の母国語でないのだから気にするな」という趣旨でした。「それにしても」と思いながらも、この男結構いい奴かもしれないと思い、それから毎晩一緒に飲食に出かけることになりました。そのなかで、「君のように統計遺伝学的手法を必要とする小さな変異を追い続ける限り、育種にインパクトを与える研究はできない」とあつく語ってくれました。Birmingham Universityで統計遺伝学の第一人者であるJinks教授に師事したGaleが語るこの言葉には、妙に説得力があり、それ以降、私は一目瞭然の大きな遺伝的変異を追い求めるようになりました。これまでに曲がりなりにもインパクトのある仕事できたのは、5歳ほど年上のGaleの言葉のお陰です。

私が京都大学に奉職して以来、36年の歳月が過ぎました。この間、私の研究室は、数多くの留学生を受け入れ、数多くの外国人学者を招きました。中国、韓国、台湾、ドイツ、USA、メキシコ、エジプトなど10カ国以上に及びます。このなかで、30年ほど前に6ヶ月間研究室に滞在したドイツJustus Liebig University教授のDr. Wolfgang Friedtとは今でも深い親交が続いています。滞在中のFriedtの「ドイツでは大学間で研究テーマと扱う作物を重複しないようにし、国全体としての育種と育種学

の発展を考えている」は、研究費の獲得に有利な研究に群がる日本の研究者および研究費の提供側が学ぶべき言葉として今でも脳裏に焼きついています。その後、1996年にFriedtの研究室に2ヶ月間滞在する機会を得ましたが、その際に院生を対象とするゼミや特別講演(週に1回他研究機関から講師を招く)がすべて午後6時以降に行われていることを知りました。9時から5時までは実験に集中させ、それ以外のことは夜に行わせるという徹底振りです。これは我々教育する側が学ぶべき点ではないかと思えます。

2005年10月の第6回京都大学国際シンポジウム(北京)「京都大学と中国の植物科学」の開催に際して、留学生であった万建民博士(中国農業科学院作物研究所長)に多方面からの援助をいただきました。京大(農学・理学・生命科学研究所10研究室)、北京大学、中国科学院、中国農業科学院などの教員、学生が多数参加し、互いの交流を深めることができました。元留学生が「シンポジウムをやるから」の一言で多くの人を動かす様子を目の当たりにし、「偉大な卒業生」をもつ我が身を誇らしく思ったことを昨日のこのように覚えています。留学生の卒業後の活躍は私にとっての宝物になっています。

University of Georgia教授のDr. Susan Wessler とは、2004年以来、トランスポソンの分子進化上の役割に関する共同研究を行って来ています。それぞれ得意な部分を担当し、結果を併せて論文に仕上げています。うまく機能し、トップジャーナルを含むいくつかの雑誌に成果を公表しています。この共同研究は小型トランスポソンの可動を証明した論文を同じ雑誌の同じ号で発表したことがきっかけとなりました。こんなことが国際交流のきっかけになるとは、夢にも思っていませんでした。

以上、記憶を思い起こして私の主な国際交流について綴ってまいりましたが、今ももっとも感じていることは、何となくやってきた国際交流でも大きな宝物を与えてくれるということです。農学研究科の国際交流がアジア地域に限定されるのではなく、全世界に広がることを願い、筆を置かせていただきます。



「稔っても頭を垂れない」直立種品種。中国東北部ではこのような品種が栽培されている。収量は日本の品種の約2倍。中国清華農業大学との共同研究で、この直立種遺伝子の単離に成功。この遺伝子は単独で収量を150%にする。

